

幼児期を知ることによって進む子ども理解

保育内容「言葉」の講義の中から

長谷部 和 子

I はじめに

あらゆる場面で学生の書く力が低下していることにお気づきの方々が多いと思う。保育内容「言葉」の講義の中で、子どもの「言葉」の援助に携っていく学生の日本語力の低下に驚き、呆れ、特にメール時代に育った学生は、自分でペンを持って書くことに意義も見出さない。

しかし、保育園や幼稚園の父兄への連絡帳記入は毎日自筆で行われ、保育者の仕事として必要最低限の義務である。その日の子どもの姿を短時間に把握し、要領よくまとめて連絡する必要がある。学生は短大在学中の2年間にある程度の力をつけて実習や就職の現場に出ることが望まれる。元来、言葉の講義に書く力を養成することは課せられてはいないが、現実実習では記録簿記入という大きな課題が与えられている。書く力のない学生を現場に送り出すことは学生にとって最初からつまずいてしまうことにもなりかねないし、我々教員も急なその場の指導で片付けられる問題でもない。

まず、学生に書いてもらおうと考え、さまざま方法を試み、学生が書く内容に悩まされることなく筆が進むような内容の題材とは何かと試行錯誤の末たどりついた方法である。誰もが知っていること・誰もが経験したこと、しかも将来関わる仕事にも役立つ内容の課題を選べば長文を書くことに嫌悪感を持つ学生たちも取り付きやすいのではないかと考え「小学校に入学する前の私」というタイトルで課題を与えた。4年間続けてみて、課題に取り組む前と後では明らかに学生たちの意欲に変化が見られた。最初課題を与えられたときに嫌悪感を抱いた学生たちも書き終えた後、かなりの数の学生たちにある変化が見られた。どのような変化が見られたかを現在2年生の学生からのアンケートを中心に

まとめてみた。

II 課題提供とアンケート

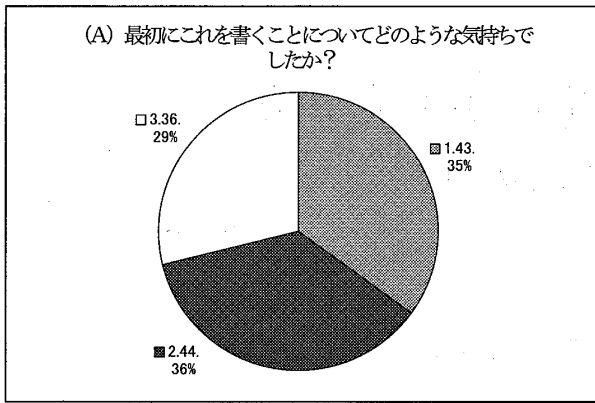
幼児教育専攻の学生は1学年約150名で4クラス編成、その全ての学生の1年次、後期冬休みの課題として与える。冬休みを選んだのは、この時期、ほとんどの学生は実家に帰省するし、寒い季節ということもあり、1年中で一番家族が集まりやすい時期ではないかと考えたからである。次に学生に対して与える注意事項は次の3項である。

- ① 原稿用紙8枚以上(3200文字以上)
- ② 先着20名までならメールでも受け付ける。
- ③ 幼少時を知る人たちに取材をして書く。
- ④ 必ずしも上記の題名でなくてもかまわない。さまざま境遇の学生がいることを考え、別の選択肢として、幼児教育に携わってみようとするきっかけになったことがあれば、それについて書く。

アンケート(数字のみの値は人数を表す・回答数123)

(A) 最初これを書くことについてどのような気持ちでしたか?

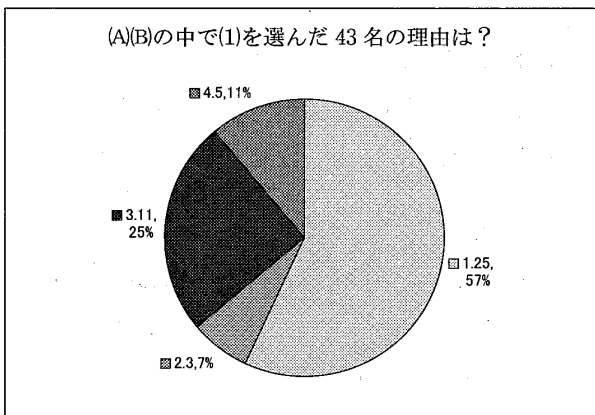
- | | |
|------------|----------|
| (1) 嫌だった | 43人(35%) |
| (2) 楽しかった | 44人(36%) |
| (3) 特に感想なし | 36人(29%) |
| (4) 無回答 | 10人 |



この時点で (1)、(2)、(3)、の割合は全体のほぼ 3 分の 1 ずつである。

(B) 嫌だった理由は [1 を選んだ人 (43) 人中]

- (1) ページ数が多い 25 (57%)
- (2) 聞くのが嫌だった 3 (7%)
- (3) 書くことが嫌だった 11 (25%)
- (4) その他 5 (11%)



嫌だった理由の中で (1) ページ数が多いに回答した学生が全体の半数以上である。

(C) 小さい頃のことを誰に聞きましたか(複数回答可)

- (1) 母 105
- (2) 父 3
- (3) 祖父母 2
- (4) 兄・姉 4
- (5) 上記以外で誰に
叔父・叔母、 1
近所の人 1
妹 1
- (6) 誰にも聞かなかった 6

- (7) 1, 2 を選択 19
- (8) 1, 2, 3 を選択 5

(D) 冬休み中、どの時期に聞きましたか

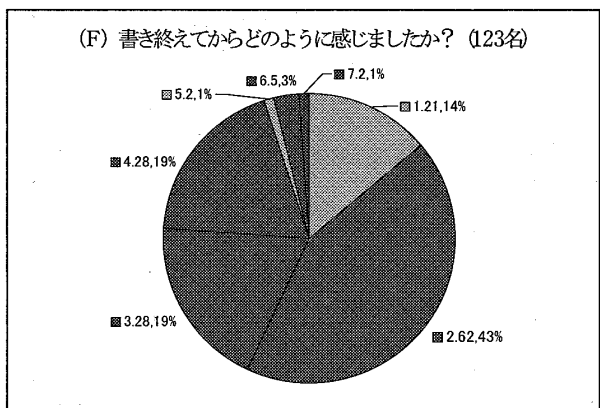
- (1) お正月 6
- (2) 冬休みのどこか 100
- (3) それ以外では
課題が出された日 4
- (4) その他 13

最近では夏休みでも自宅に帰らない下宿生や寮生が多くなっているが、お正月を含む冬休みにはほぼ全員が自宅で休みを過ごしたり、親戚が集まったり、逆に親戚に出向く機会も多くなるだろうと考え、この時期に課題を与えた。

(F) 書き終えてからどのように感じましたか?

複数回答可)

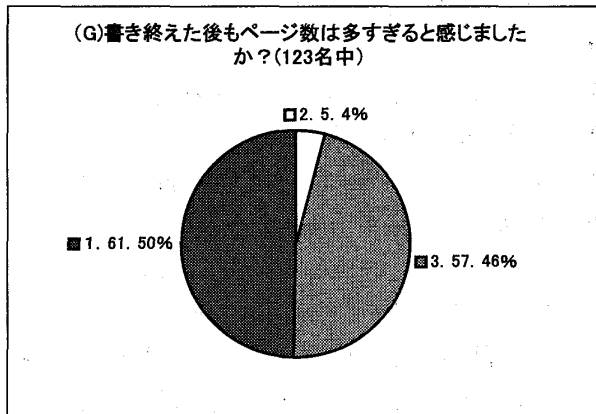
- (1) 最初と同じ感想だ 21 (14%)
- (2) 書いてみて知らなかった自分を知ってよかった 62 (43%)
- (3) 幼い頃の自分を知ったことが将来保育士として役立つ 28 (19%)
- (4) 親に感謝の気持ちが持てるようになった 28 (19%)
- (5) 自分のことを知って後悔した 2 (1%)
- (6) その他 5 (3%)
思い出すのが楽しかった 4
文章化することで心の整理がついた 1
- (7) 何の役にも立たなかった 2 (1%)



複数回答のため割合であらわしても正確な数字と判断するには無理があるが、円グラフの一番濃い色で示されている部分が課題を書いたことに対して好意的に捕らえている学生である。反対に効果が無かったと回答した(1)最初と同じ感想だが21名、(7)何の役にも立たなかったが2名と計23名で(A)書くのが嫌だったと回答した43名の半数に減っていた。

(G) 書き終えた後も課題のページ数は多すぎると感じましたか？(123名)

- (1) 多かった 61(50%)
- (2) 少なかった 5(4%)
- (3) ちょうど良い長さだった 57(46%)



ページ数については多いと回答した学生と良かったと回答した学生がほぼ半々であった。これは書いてみて改めて多いと感じた学生とインタビューして書いているうちに原稿用紙8枚では足りなかった学生もいた。5名はもっと長くても気にならなかった、と書いていた。

(H) この課題の感想について感じたことを書いてください。

- (a) この課題の後、母と姉と楽しく会話が持てるようになったので幼い頃を思い出すのは良いことだと思う
- (b) 親は私のことをしっかり覚えていてくれたのですごいと思ったし、ありがとうと感謝の気持ちが持てた
- (c) このレポートを書くとき楽しかったので、

- 他のレポートよりも書きやすかった
- (d) 小さい頃の私を知り、しかもこれがこれからの勉強に役に立つ課題でよかったです。
- (e) 自分はひとりだけで育ったわけではなく、誰かの手助けがあって育ったと思った
- (f) 親もよく私をここまで育ててくれたなと思った
- (g) 親の私の幼い頃に対しての気持ちをすごく感じる事ができた。保育士として必要な事柄についてすごく考えさせられた
- (h) 楽しく書けました
- (i) 自分の親の出会いや名前について知ることができてよかった

好意的な感想がほとんどであったが、これは学生が気を使ったか、あるいは書くことが嫌いな学生が少しでも書くことを減らそうとて何も書かなかった結果かもしれない。

(E) インタビューによって判った自分の知らなかったことについて書いてください。

書かれていたほとんど全てを網羅した。学生は幼い頃を思い出し、非常に楽しそうに書いた。

- 元気で活発な子だった (8人)
- やんちゃだった (7人)
- 人見知り激しい子だった (6人)
- 名前の由来を知った (4人)
- 甘えん坊だった (4人)
- 静かな子だった (4人)
- 我儘な子どもだった (3人)
- 病気がちで両親を心配させた (2人)
- あまり手がかからなかった (2人)
- 両親に愛されていた
- 大切な子だった
- すごく甘やかされていた
- 相当親に迷惑をかけた
- 私がめがねをかけることになったときに、親がショックで泣いていた
- お父さんが会社まで連れて行ってくれたこと
- 私が生まれたとき、お母さんが嬉しくて夜

も眠れなかった。そして、お兄ちゃんが
自転車で病院まで見に来た

- 私が思っていた以上に可愛がられていた。
- 弟思いだった
- 今の自分とは違うな
- 病気はしなかった
- 小さいときに手術をした
- 小さいときからコーヒーが好きだった
- トイレが一人で行けるようになったのが早かった
- 何でも喜ぶ子
- 小さい頃はお父さん子だった
- 自分の成長の過程がわかった
- 何事に対しても楽しく遊んでいた
- 病院ばかりに行っていたし、弟ができてから吃音が始まった
- よく走り回っていた
- 風邪を引き母の母乳が止まった
- 頭が悪かった
- 食い意地がはっていた
- よく眠る子
- 我慢強くあまり泣かない子だった
- よく男の子に間違われていた
- 運動能力の良い子
- 何事にも興味を示さない子
- スヌーピーが好きだった
- 小さい頃の出来事
- どのような性格の子だったか
- 周りの人に迷惑をかけていた
- 感染症の病気によくかかった
- 言葉が遅い子だったが3歳から良く話すようになった
- いろいろ人騒がせな子だった
- 思っていたより手間のかからない子
- 兄か姉か一人増えていたかもしれなかった
- はいはいをしなかった
- 歩くのが遅かった
- お姉ちゃん子だった
- いろいろなことをした
- 男の人を見ると泣く子(お父さんでも駄目だった)
- ぬいぐるみ全部が駄目で見ると泣いた
- 人が好きな子

- 自由奔放に育てられた
- ほとんど祖母に育てられた
- 私のことをサルだと父が言っていた
- 出産のときにへその緒が2重にからまっていた
- 一人の友達とだけ遊んでいた
- 音楽が好きでワンマンショーをやっていた子
- 近所との関わりがわかった
- 怖がりだった
- 男の子の遊びが好きだった、その結果男の子によく間違えられた
- 私が生まれた後で初めて母のおなかに私がいたことを知った隣の人がいた
- ちょっと馬鹿だった
- 幼稚園で一番の問題児だった
- 何でも拾って食べた
- よく泣いた
- すぐにどこかに行ってしまった
- 言葉の能力がいまいちだった
- 予定より生まれるのが2週間遅かった
- 名前が生まれる前から決まっていた
- 兄弟の中で話すのが一番早かった
- 生まれてから名前を変更した
- 予定日が3月7日でおばあちゃんたちにひな祭りに生んで欲しいと母が言われていた。結果的に7日に生まれた
- サルのようだった
- 眠くなると笑っていた
- 牛乳を1日1杯飲んでいて
- 保育園に行くのが嫌いだった
- 歌が好きだった
- 父の希望は、男の子に生まれていたら、野球選手にしたかった
- おじいちゃんの生まれ変わりだと言われた
- 泣き虫だった
- ひょうきん者だった
- 子どもの頃は好き嫌いが無かった
- 目立つのが好きだった
- 兄に負けまいと必死で向かっていった
- 生まれるときにへその緒が首にからまっていた
- ミルクが少なかったら振って泡立てて飲ん

でいた

- 最初に話した言葉が「じゅーちゅ」だった
- 今より性格がきつかった
- 男の子とばかりけんかしていた
- 女の子とあまり遊ばない
- ご飯をあまり食べなかった
- 気が小さい子だった
- 周りの子より体が小さく成長が遅かった
- 音楽が好きだった
- 親の手を煩わした
- 病気をよくした
- 自我が強かった
- 生まれるまで時間がかかった
- 当時の親の考え
- 幼稚園の頃の自分
- 体を動かすことが好きだった
- 人の話に割り込んで話したがった
- 生まれたときから両親・祖父母に迷惑をかけた
- 誰にも言わずに外に出た
- 動物が好きだった
- 言葉で言うより行動が先だった
- 子どものときにかかった病気
- 怪我をした
- 病気がちだった
- 今とは違い、虫ばかり殺していた
- お母さんが妊娠中毒症にかかっていた
- いたずらっ子
- 母乳嫌いだった
- 「おねしょ」ばかりしていた
- 妹に攻撃的だった
- 怪我をたくさんしていた
- どこへでも付いていった
- 独り言が多かった
- 弟の面倒を良く見ていた
- 父と母の出会い
- 怪我をよくした
- 親の出会い
- 病気はしなかった
- 頑固なところ
- 元気で好奇心が旺盛だった
- 元気な子だったが、泣くことが多かった
- 知らない人にも付いていった
- 寝返りを打つようになって、落ちそうになり目が離せなかった
- 機嫌がいいとニコニコしていた
- 恥ずかしがり屋
- 体が弱かった
- 歌が好きだった
- 離乳が早かった
- お風呂でおぼれた
- よく外へ脱走した
- とても要領が良かった
- 指先を使う遊びが好きだった
- 口が達者だった
- 歌が好きだった
- 小さいときから大人びいて子どもらしくなかった
- 元気だった。家族がめっちゃ仲良かった
- 恥ずかしがりやだった
- よく泣く子だった
- 買い物中に迷子になって放送で呼び出された
- トイレ槽の中の水で遊んだ
- 女の子なのに人形遊びを全くしなかった
- 家の中から歩いている人、車に乗っている人に手を振っている子ども
- トイレトペーパーを1ロール、トイレに流して詰まらせた
- アトピーだったのは知っていたが、お餅、あられが全く駄目だったことは知らなかった
- 大人を困らせていた
- チョコレートが大好きだった
- 面倒見が良かった
- ままごとや人形遊びを全くしなかった
- 兄と仲が良かった
- ミルクは飲まずヤクルトで育った
- 他の子と比較してもあまり物を欲しがらなかった
- 綺麗好きだった
- 本当はたくさんのお名前を考えてくれたが、親の希望のお名前にならなかった
- 個性的だった
- 保育園や幼稚園に喜んで行っていた
- 私が生まれた日は選挙で大変だった

- 絵を描くことが好きだった
- 父が女の子だったことを喜んだ
- 呼ぶとすぐ返事をして振り向いた

Ⅲ 事例

次に学生の書いた「小学校に入学するまでの私」の中の具体的な3例の一部をあげてみた。それぞれに特徴が見られる。学生自身が自分の過去を振り返りながら現在置かれている立場・それを今後の自分にどのように反映できるのか、本人もしっかりと把握できているとは言いがたいが、おぼろげながらも掴み取ろうとしている姿が見受けられる。

事例1

必ずしも先生の言うことを素直に聞く子どもばかりではなく、それが自分であったことに驚きを感じている。家族の愛に支えられて今の自分があるのだと知り、多くの子どもにも愛情豊かに接しようと述べている。

1984年、1月19日、午後2時8分。3人姉妹の末っ子として生まれた。体重3,210g、身長50、6 cm、胸囲30.5cm、頭囲31、2 cm、3人姉妹の中では一番大きい子だった。「愛」と書いて「めぐみ」と読む私の名前は、父が「誰からも愛され、めぐまれるように」という願いを込めてつけてくれたものである。大人しくてよく寝ていることが多く、夜泣きもあまりしない子だった。・・・中略・・・

夏のプールの季節にはプールで遊ぶことは大好きだったけれど顔を水につけることができなかった。みんなが一斉に顔を付ける時間を計るのが嫌でみんなが顔を付けているときに私だけ顔を水面の少し手前で止めて顔を付けるフリをしてその場をしのいでいたけれど先生にバレて叱られた。自分がズルをする子どもだとは全く知らなかった。私の様に先生の言うことを聞かない子どもにも寛大にしてあげたい。・・・中略・・・ 私の生い立ちを母、祖父母、伯父に聞いたけれどみんなあまり覚えていなかった。3人姉妹だったからか。姉の幼い頃と間違えたりしていたりもしていた。それでも、家族だな

と感じたのは、みんな揃って同じ事を言っていたことだ。今、幼い頃の話聞いてみると、幼稚園に入ってから出来事が自分でも何となく記憶に残っていたのもあってすごく懐かしい気持ちになった。私は父・母・姉2人と曾祖母・祖父母と7人の家族に支えられて今があるのだと感じた。働くようになって子どもたちに愛情を注いであげたい。

事例2

口蓋裂で生まれ4歳ぐらいまでほとんどの時間を病院通いと言語治療教室での発音練習で取られ、その時期両親がどれほど私の将来を考え、どのように育てていくかを真剣に話し合っていたこと等、今回の課題で聞くまで知らなかった。

略・・・分娩室に入ってから短い時間で私は生まれた。産声は元気だったらしい。そのときの母の気持ちを聞いてみたら感動もなく泣かなかったと言っている。その後、先生が父に連絡してくれて父は私を見に来てくれたが、お昼を過ぎていたので誰もいなくなり、父は途方にくれたらしい。母はベッドに寝ながら、子宮を閉じるためにお腹に氷を置いた。それから昼食が出たが、メニューはお赤飯だった。しかし、食べれなかったと言っていた。その日の夜に主治医が来て母に「ミルクが飲めない」と伝えた。それは私に吸う力がないということだった。だからミルクは助産婦さんが与えてくれた。そのときの母は落胆することもなく、「あ～、そうなのか」としか思わなかったと言っていた。むしろ父のほうがショックを受けたらしい。・・・中略・・・ 形成の先生に手術が必要と言われ、1歳半になったら手術をするという説明を受けた。ただ、哺乳瓶だけは特殊なものを使った。飲み終えた後、ゲップをさせるのが私の場合は鼻から口からミルクをほとんど出してしまっていた。そのため着替えは常に常備し、ミルクを飲むたびに着替えをしていた。そのときの母の口癖は「お腹をすかせたら又飲ませばいい」だったらしい。・・・中略・・・ 3年間の幼稚園生活はいっぱい遊んで絵を描いていっぱい寝たことがとても楽しかった。口蓋裂という病気を抱え

ながらも必死に言葉を覚えたし健常者と変らない日常生活を送ることができた。小学校入学のときは普通に話すことも運動することもでき、「さ・し・す・せ・そ、た・ち・つ・て・と」にちょっとつかえた程度である・今はほとんどわからないけれど、下唇が少しずれていて、それを小学校の時に友達に指摘され傷ついたときもあった。唇が少しずれていることがコンプレックスで、悩み、母を一時ノイローゼに追い込んでしまったこともあった。そんなときに母の悩みを聞いてくれ、ケアしてくれたのが子ども病院の言語科の先生だった。私も両親も先生にとっても感謝しているしお世話になったことを忘れないでいたいと思う。子どもに何かを教えるというのはとても大変なことが良くわかった。でもそのなかでも楽しいことが沢山あるということも解ったから、子どもに夢を与えてあげられるような先生になりたいと思ったし、どんな子どもにも慕われ、信頼されるような先生になりたいと思う。

事例3

この学生は課題を与えたときに「このタイトルでは書けない」と言ってきた。理由は「自分の幼い頃の話を聞ける人はいないし、いたとしてもあの人には聞きたくもない」と言う理由だった。それで与えた課題は「幼児教育を選んだ理由」だった。しかし、提出された内容は自分の幼児期を素直に正直に書いたものであった。

私ที่บ้านにいた頃の思い出は嫌なことばかりで、思い出したくない事ばかりです。できるなら忘れてしまいたいとも思います。小さい頃の事はあまり覚えていません。それでも小さいときは私の家は普通だと考えていたと思います。覚えていることといえば幼稚園・保育園には行っていないことと塾に通っていた事です。・・・中略・・・

私はというによく怒られたので、2種類目(人間は2種類に分かれる)の人間だと考えていました。そう思うと一人の場所になれるトイレに行き、頭の中で自分を殺します。ぐちゃぐちゃに立ち上がれないぐらいにします。そうすると

真っ白い自分が現れます。その新しい自分に、今度は気にいられるよう、良い子でいられるように言い聞かせて、部屋に戻るので。それをいつも繰り返していました。そして私は、外では家の秘密を守らなければなりません。本当のことを言うてはいけないし、今日外で話したことを毎日報告しなければなりませんでした。だから何も話してはいけないと思い、人と話すことが大嫌いでした。幼児期には友達という存在も知らなかったし、小学校に入学してもみんなが知っている遊び等も分からず、中々友達もできませんでした。それでも、幼稚園から塾に通っていたので勉強はでき、その先生からも「問題ありませんね。このまま勉強して先を伸ばしてください。」と懇談では言われるだけででした。人というのは単純だと思いました。目に映りやすい結果がよければ、世の子はよいと評価されるからです。・・・中略・・・ 家は大嫌いだけど2つだけ感謝したいです。1つ目はお姉ちゃん(実姉)に会えたからです。お姉ちゃんに対してたくさん悪いことしたけど、夜になるとお菓子を沢山くれたり、遊びに連れて行ってくれたり、沢山優しくしてくれたからです。2つ目は家の環境があったから、高校の先生方・施設の職員さんたち、温かい人に会えたことです。もう19歳なのにいつもくっついて歩く甘えん坊でいいわけばかりするのに、自分の事を見ていてくれる人がいることを本当に幸せだと思います。いつか私も人を受け入れられる人になりたいと思っています。

IV 結果と考察

アンケートからも判るように、書く前に課題自体が嫌だと感じていた学生43名のうち、課題終了後、(F)の

- (2) 書いてみて知らなかった自分を知ってよかった
 - (3) 幼い頃に自分を知ることが将来保育士として役立つ
 - (4) 親に感謝の気持ちが持てるようになった
- と、43名中36名が上記のように意識に変化が見られた。学生全体で書いて良かったと答えた学生は80名(65%)になり、35%から65%へ

と増加した。

更に、ページ数が多いと答えた学生25名のうち書き終えた後、ページ数が、(2)少なかったと大きく考えの変わった学生が1名、(3)ちょうど良い長さだったと答えた学生が11名、更に、2名が「親から幼い頃の話聞くことが楽しかった」と最初非常に嫌がった学生でも意識に変化が見られた。

学生の課題を読んでいて、現在の学生の幼児期の生活に関して私自身も始めて知る内容が多く、最近の学生気質を理解する一つの手段にもなっている。又、幼児教育に進むようになったきっかけは、幼少時のときの幼稚園や保育園の先生の影響が大きいことも知った。そのためか、幼少時から将来は幼稚園か保育園の先生になるのだという目的意識がはっきりしている学生が多いように見受けられる。

非常にわがままに甘やかされていた自分をはじめて知り、それを大事に育てられたと感謝しつつも、その育て方がいけなかったのだと自分の子どもは同じ扱いはしないと述べる学生もいる。学生は案外しっかり親を見ているなど感心させられる部分もある。

現在の学生は毎日の生活の中でアルバイトに取られる時間が非常に多かったり、親側から見れば両親とも働いている場合がほとんどで、特別な問題でも起きない限り、親子揃って生活に影響を受けない内容の何かについて話す時間を持つということはほとんどないのが現実である。その中で子どもの幼い頃を話すというのは、聞く側のみならず、親の立場からもあらためて子どもの成長を見つめなおすという点で無駄な時間ではない。この年代の親子の触れ合い時間を増やすのは好ましいことではないかと考える。課題の中の記憶に残るコメントを2例挙げてみる。

- ① 3歳の誕生日に祖父が誕生日のケーキを買ってくれたが、店にある全種類のケーキ(20個以上)を1個ずつ買ってくれた。いろいろなケーキが食べたいだろうからという理由からである。
- ② この課題で親と長い時間話をしたが、もう10年来このように長く親と話したことは無かった。とても良い機会を与えてもらってよかった

のと親の愛情を深く感じられた。

自分の幼児期を知ることによって学生たちが、育ててくれた身内に感謝の念が生まれたり、廻りの人間を見る目に変化が現れ、かつ将来保育士として働くようになった時、手のかかる子どもや個性的な子どもに出会ったときに、その子らが特別な存在ではなく自分たちの中にもその因子は充分存在し、それに対して廻りがどのように働きかけてくれたかを知ることが如何に役に立つかを知る機会を与えるきっかけになったのではないかと感じている。

課題の提供やアンケートの収集によって得る情報には個人のプライバシーに関するものが含まれている。収集した情報の取り扱いは研究対象としてのみ扱い、個人が特定されるような情報の扱いはしないなど充分注意する。

— 児童教育学科・幼児教育専攻 —